

| | | | |
|---------|----------|----------|----------|
| 臨床薬理学 | 2年・後期 | 1単位 15時間 | 教授 田中 基晴 |
| 科目カテゴリー | 看護の対象の理解 | 科目ナンバリング | 33210402 |

1. 授業のねらい・概要

昨今、薬物の誤投与や過剰投与による事故が問題となっています。処方された薬剤を実際に投与するのは多くの場合看護師であることから、看護師は「最後の砦」と言われています。看護師は間違った処方や過剰投与によるリスクにいち早く気付くことが重要です。そのためには薬剤の基本的な薬理作用や副作用、危険な併用薬剤を知ることが必要です。とりわけ、命に関わるような薬剤や、薬剤の飲み合わせの危険を理解しておくことは看護師にとって極めて重要です。すなわち、学生が臨床の現場で薬剤の過剰投与や副作用、飲み合わせにいち早く気づけるように、主な薬剤の薬理作用、副作用について知り、臨床に直結する薬理学を身につけることを目的とする。

2. 到達目標

1. 学生が薬理学の分類と臨床薬理学の概要を理解し正誤の文章を選択することができる。(D-2)
2. 学生が薬（薬物）とは何か、薬物療法の目的、物に関する法令を理解し正誤の文章を選択することができる。(D-3)
3. 学生が薬は生体内でどう作用するのか、その作用様式を理解し正誤の文章を選択することができる。(D-2)
4. 学生が薬物療法の基本を知り、理解できる。(D-2)
5. 学生が薬はどのようにして作られるのか、新薬開発と臨床試験などを理解し正誤の文章を選択することができる。(D-2)
6. 学生が疾患別薬物治療（中枢神経系作用薬など各種）を理解し正誤の文章を選択することができる。(D-2)
7. 学生が安全域の狭く慎重投与を必要とする薬について、その作用と危険性を深く理解し正誤の文章を選択することができる。(D-2)

3. 授業の進め方

基本的には教科書を中心にして講義を進める。必要に応じて参考資料のプリントを配布する。

【アクティブ・ラーニング実施の有無】

アクティブ・ラーニングとして、小テストを6回目の授業後半に実施し次週返却すると共に教員が正解を解説する。

「学んだことを確認し、次へつなげる」ことを目的とする。

【ICT活用の有無】

ICTは活用しない。

4. 授業計画（講義）

| 回 | 授業内容 | 授業形態 | 事前事後学修（学修課題） | 担当 |
|---|-------|------|---|-------|
| 1 | 薬理学とは | 講義 | 予習：教科書の「いちばんやさしい薬理学」の「1章 薬理学とは」(p10～p38)の部分を事前に読んで、わからない部 | 田中 基晴 |

| | | | | |
|---|-------------------------|------------|---|----|
| | | | 分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。 | |
| 2 | 脳・中枢神経系疾患に使用する薬剤について | 講義 | 予習：教科書の「いちばんやさしい薬理学」の「2章 神経系に作用する薬」(p42～p68)の部分を事前に読んで、わからない部分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。 | 田中 |
| 3 | 循環器系・血液・泌尿器系に使用する薬剤について | 講義 | 予習：教科書の「いちばんやさしい薬理学」の「5章 循環器系・血液に作用する薬」(p104～p123),「8章 泌尿器系に作用する薬」(p178～p188)の部分を事前に読んで、わからない部分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。 | 田中 |
| 4 | 消化器系・内分泌系に使用する薬剤について | 講義 | 予習：教科書の「いちばんやさしい薬理学」の「4章 消化器系に作用する薬」(p86～p100),「9章 内分泌系に作用する薬」(p192～p210)の部分を事前に読んで、わからない部分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。 | 田中 |
| 5 | 炎症・免疫系疾患に使用する薬剤について | 講義 | 予習：教科書の「いちばんやさしい薬理学」の「6章 炎症・免疫系に作用する薬」(p128～p140)の部分を事前に読んで、わからない部分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。 | 田中 |
| 6 | 抗癌剤・呼吸器系疾患使用する薬剤について | 講義 小テスト | 予習：教科書の「いちばんやさしい薬理学」の「10章 抗腫瘍薬」(p214～p229),「3章 呼吸器系に作用する薬」(p72～p82)の部分を事前に読んで、わからない部分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。 | 田中 |
| 7 | 抗感染症薬剤について | 講義 | 予習：教科書の「いちばんやさしい薬理学」の「7章 抗感染症薬」(p144～p172)の部分を事前に読んで、わからない部分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。小テストの間違った箇所を中心によく復習し、同じ間違いはしないレベルに達する。 小テストで間違った箇所を中心によく復習し、同じ間違いをしないレベルに達する。 | 田中 |

| | | | | |
|---|-----------------------|--|---|----|
| 8 | その他の症状に使用する薬について（眼科系） | 講義 (授業 時間 の半 分) 期末 試験 (授 業時 間 の半 分) | 予習：教科書の「11章 目に作用する薬」(p232～p241)の部分を事前に読んで、わからない部分をマークする。 復習：授業で配布した授業画像プリント及び教科書を用いて、授業内容を振り返る。 定期試験の正解を確認し、間違った箇所を中心に復習する。 | 田中 |
|---|-----------------------|--|---|----|

5. 成績評価の方法・基準

定期試験（受験資格は3分の2以上のコマ数出席者）70%，6回目授業最後に実施する小テスト20%，受講態度10%，として総合的に評価する。成績評価は、「2. 学修の到達目標」に示した評価観点毎に、ルーブリック評価する。評価基準の詳細（ルーブリック）は、第1回講義内に別途説明する。

6. テキスト・参考文献

教科書：いちばんやさしい薬理学，木澤靖夫監修，成美堂出版，2017年

7. 準備学習に必要な時間，又はそれに準じる程度の具体的な学習内容

最低90分の予習の中であらかじめ、授業前に必ず一度は予定範囲を読んでおき、わからない部分をマークし授業でその部分を集中聴講する。また、復習(90分以上)は、その日のうちに行い、授業で配布したプリント及び教科書を用いて授業内容を振り返り、小テストに備える。また、小テストは重要事項を試験しているの、小テストの後はよく復習して、定期試験に備えること。

8. 受講上の留意事項

「生化学」，「生理学」の知識は「薬理学」を理解する上で必須であるので、本教科を受講するまでに既習の「生化学」，「生理学」を復習しておくこと。

受講遅刻，欠席および授業中の私語，スマホ操作・閲覧等，授業と関係ない行動は，受講態度として評価対象とするので注意すること。また，不明点，理解できない点があれば，遠慮せず，質問すること。

9. 課題に対するフィードバックの方法

当該授業科目の重要課題についてまとめたものは，単元毎配布し，空欄を学生に埋めてもらう。正解は後に教員が解説する。また，小テストは実施翌週に学生に返却し正解を授業内に教員が解説する。

10. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

必須科目である。(履修要項・学生便覧参照)

11. 実務経験のある教員等による授業科目

製薬会社での新薬開発経験を活かして講義を行う。